

領域「環境」で幼児期に育む資質・能力に関する研究 ～小学校教育との円滑な接続を視野に入れて～

A Study of the disposition and Ability by Early Childhood
in Field of the Environment

菅 沼 敬 介

Keisuke SUGANUMA

福岡教育大学 学校教育ユニット

(令和元年9月30日受付, 令和元年12月12日受理)

本稿では, 令和2年度より実施される幼児教育と小学校教育を円滑に接続する「スタートカリキュラム」の編成に携わる中で, その細部について理論の構築, 考察を目的としたものである。「スタートカリキュラム」の編成の際には, 幼児期に育むべき資質・能力を明確にしておく必要がある。そこで, 幼児教育の領域「環境」を本研究の射程とし, 幼稚園教育要領, 保育所保育指針から領域「環境」で目指す幼児の姿や実際の幼稚園, 保育園が領域「環境」において目標としていることをインタビュー調査によって明らかとする。

I はじめに

生活科は, 平成元年告示の学習指導要領において新設された教科であるが, 「幼稚園から高等学校までの教育を一貫的にとらえ, 各教科等の内容の一貫性を測ることにした。特に, 小学校教育については, 幼稚園教育との関連を緊密にする観点から, 低学年教育の在り方を見直し, 新しい教科として生活科を設けた」¹⁾と記されているように, 新設時から幼稚園教育との接続・連携の機能が重視された。平成29年告示の学習指導要領においても, 平成28年12月に中央教育審議会から出された「幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策について(以下「答申」)」²⁾では, 「学校段階間の接続」「スタートカリキュラム」「幼児教育で身につけたことを生かす」等の, キーワード, キーセンテンスが随所に見られ, 幼児教育との接続は, 更に重視されていることがうかがえる。幼児教育と小学校教育の接続に焦点を当てた時, 新設時以来, その役割の一端を担ってきた生活科の役割は大きいと考える。筆者は, これまで生活科を中心として「生活科における自然体験活動を基

盤とした『人とかかわる力』の育成に関する研究」³⁾や「活動を通して『自己肯定感を高める生活科学習』に関する研究」⁴⁾を行ってきた。生活科は, 「具体的な活動や体験」⁵⁾から学ぶ教科であり, 「遊びから学ぶ」⁶⁾教科とも言われており, これまでの研究を通してそれらのことを改めて実感した。「遊びをとおして総合的な指導」⁷⁾を行う幼児教育と非常に近い存在にある教科であるといえる。

さて, なぜ学校段階間の接続が重要視されているのだろうか。加藤智(2015)が「小1プロブレムの原因は何だろうか。直接的な原因としては, 幼児教育(幼稚園や保育園等)と小学校教育との間にある大きなギャップ(段差)といえるだろうか」⁸⁾と述べているように, 小学校1年生の学校, 教室, 授業にたいする不適應の問題を指摘している。更に, 加藤は「幼稚園教育と小学校教育のギャップについては古くから議論がされてきている」⁹⁾や「なぜ近年小1プロブレムが目立つようになったのか」¹⁰⁾と疑問を投げかけている。新保真紀子(2001)は小1プロブレムについて「幼児期を十分, 生ききれてこなかった, 幼児期を引き

ずっている子どもたちが引き起こす問題¹¹⁾と述べている。近年の急速な社会の変化に加え、早期教育を行う幼稚園や保育園等が増えたことで、幼児期の遊びを十分に経験しなかった子どもの増加も背景にあると考えられる。新保が述べているように、遊びの少なさが原因とするならば、幼児教育で育む資質・能力や幼児教育の基本を小学校に寄せて、画一授業に慣れさせたり、時間を区切って時間割を作成したりし、訓練させることで慣れさせることは有効ではないといえる。逆に小学校教育において、幼児教育の基本を正しく理解し、対応していくことが、子供の成長の為には得策なのではないかと考える。しかし、小学校教員がどの程度幼児教育の基本を理解しているのかは疑問である。本学では、毎年200名以上の学生が小学校教員になるが、その中で幼稚園教諭の免許状をもっているのは一握りである。

そこで本研究では、幼児教育と小学校教育の円滑な接続において、重要な幼児教育の現状と育成すべき資質・能力を論考していく。その際、筆者がこれまで生活科教育の研究の中で、最も遊びをイメージしやすい自然体験活動や自然遊びに着目する。つまり、幼児教育での領域「環境」を射程とし、研究の出発点とする。筆者が、研究協力を受けている小学校では、保育園児とともに、原っぱや虫さがしに出かけたり、秋の自然物を使ったおもちゃランドで遊んだりする交流活動が展開されている。こうした交流活動も領域「環境」を射程とした後押しとなっている。本研究を通して幼児教育と小学校教育の接続が円滑におこなうことへの示唆を得ることを研究の目的とする。

Ⅱ 領域「環境」で育む資質・能力

1 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

幼稚園教育要領には、「幼稚園教育において育みたい資質・能力及び『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』¹²⁾が示されている。幼稚園教育において育みたい資質・能力とは、「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」¹³⁾である。更に、それぞれの資質・能力についても解説がある。例えば、「知識及び技能の基礎」とは、「豊かな体験を通じて、幼児が自ら感じたり、気付いたり、分かたり、できるようになったりする」¹⁴⁾と示されている。資質・能力については三本柱で、小学校教育と共通となっていることが分かる。更に、それぞれの資質・能力の内容については、生活科の「知識及び技能の基礎」に非常に近いこと

がうかがえる。生活科の「知識及び技能の基礎」は、「気付き」としており、「生活科でいう気付きとは、対象に対する一人一人の認識であり、児童の主体的活動によって生まれるものである。そこには知的な側面だけでなく、情意的な側面も含まれる」¹⁵⁾と記されている。このことより、幼稚園教育で育みたい資質・能力と生活科の資質・能力は非常に近いことが予想できる。しかし、当然ながら全く同じと言うわけではない。生活科の「気付き」とは、「無自覚だった気付きが自覚化されたり、一人一人に生まれた個別の気付きが関連付けられたり、対象のみならず自分自身についての気付きが生まれたりすることを、気付きの質が高まったという」¹⁶⁾と記されているように、生活科での学びはあくまでも質を高めるところにある。一方、幼稚園教育は、質を高めるところまで求めておらず、自覚化された気付きのレベルであると言えよう。

次に、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿とは「健康な心と体」「自立心」「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「社会生活との関わり」「思考力の芽生え」「自然との関わり・生命尊重」「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」「言葉による伝え合い」「豊かな感性と表現」¹⁷⁾の10項目である。この幼児期の終わりまでに育ってほしい姿は、「到達すべき目標ではないことや、個別に取り出されて指導されるものではないことに十分留意する必要がある」¹⁸⁾とあり、つまり、このような姿に「させる」ことを目的としていない。あくまでも成長の方向性であり、期待するにとどめたい。幼稚園教育は、一人一人の発達にに応じて、支援したり援助したりすることが重要なのである。よって、資質・能力についても同様の考え方が出来ると考える。つまり、例えば「知識及び技能の基礎」の場合、「気付かせる」のではなく、幼児が自ら気付けるように「手助けする」や「促す」が的確であると考えられる。この部分も生活科の趣旨に類似している点である。

2 幼稚園教育要領及び保育所保育指針での領域「環境」

(1) 幼稚園教育要領における領域「環境」

幼稚園教育要領解説には、「環境」という単語が随所に現れる。大きく2つに分けると、生活の構成要素としての「環境」、そして学習対象としての「環境」である。領域「環境」とは、後者の環境のことを意味している。まずは、このことを念頭に置いておく。領域「環境」は、「周囲

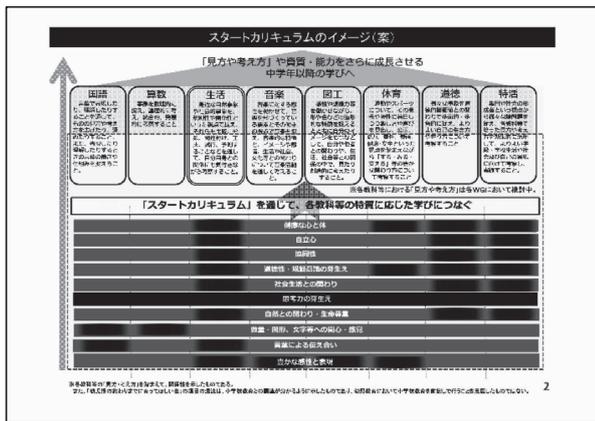


図1 スタートカリキュラムのイメージ²¹⁾

の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う¹⁹⁾と記されている。つまり、領域「環境」で育みたい資質・能力とは、環境と関わるのがスタートとなる。また、幼稚園教育要領における領域「環境」を、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿で見ると、「思考力の芽生え」「自然との関わり・生命尊重」「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」が対応するところである²⁰⁾。ここで、留意しておきたいのは、図1のスタートカリキュラムのイメージを見たときに、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿のほぼすべてが、生活科と関連しているが、「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」のみが、唯一生活科と関連性が見出されていない。つまり、領域「環境」で育みたい資質・能力が、イコール生活科で育む資質・能力ではない。しかし一方で、本研究で射程とした、領域「環境」以外の4領域においては、領域「環境」よりもむしろ生活科との関連性に隙がなく、生活科を核とした円滑な接続やスタートカリキュラムを考えることができる可能性を見出すことができる。

(2) 保育所保育指針における領域「環境」

保育所保育指針においても、領域「環境」については、幼稚園教育要領とほぼ同一である。幼稚園教育要領が「幼児」に対して、保育所保育指針は「子ども」と記してあり、その園に合わせた表現はしてあるが、内容で見ると同一である。保育所保育指針には、「幼児教育を行う施設として共有すべき事項」²²⁾があり、「育みたい資質・能力」や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、幼稚園教育要領に示されているものと同様の記述となっている。つまり内容は、小学校に入学した

ときに、経験や幼児教育で学んで来たことに大きな差が生じないように、幼稚園教育要領とほぼ同一に構成されていることが考えられる。

3 領域「環境」で育みたい資質・能力

領域「環境」と生活の構成要素としての「環境」は、非なるものと先程は記したが、神長美津子(1998)が「子どもひとりひとりが自己充実できる『適当な環境』をつくり出すことは大切なのです」²³⁾と述べているように、領域「環境」に限らず、学び、成長する為には、その状況に応じた環境構成は重要である。更に、神長は「知的教育は、感性を育むことから始まり、そのことが知性を育てることにつながっている」²⁴⁾と述べた上で、「感性は、環境からの刺激を知覚しその印象を受け止めていく力」²⁵⁾と述べている。感性は感情の一側面であり、感動したり、自分のことを素直に表現したりすることが、感性の豊かさや鋭い感性といわれる。つまり、領域「環境」において、好奇心や探究心をもつことは、感性の豊かさであり、その為には、子どもを取り巻く構成要素としての「環境」が不可欠であるといえよう。つまり、充実した場の設定が、子供の好奇心や探究心をくすぐり、領域「環境」において育みたい資質・能力として子どもに身に付くものと考えられる。

那須信樹(2002)は、「自然と直接、触れ合うことは、子どもの好奇心や思考力、表現力の基礎を高め、草花の美しさや生長過程の不思議さに『感動』や『驚き』、自然に対する『畏敬の念』を覚えるといった、感性を育てる上で非常に重要な意味をもっているのです」²⁶⁾と述べており、これを領域「環境」の内容の取扱いから指摘している。

山田敏(1999)は、「乳幼児期の最も根底にある発達課題が個性的全面発達であることを考えるとき、子どもをとりまく環境がこのような人工物だけでよいはずはなからう。例えば、自然や自然環境と直接かかわることによってのみ育つものはかならずあるはずである。あるいは、それらと直接かかわることによって望ましい教育的成果をもたらし得るような経験がかならずあるはずである」²⁷⁾と述べており、更に、「人間性の観点から重要な意味をもっている情緒や情操の側面の調和のとれた発達も生き物や人間を含む自然とのかわりがその基盤であり重要である」²⁸⁾と、人工物ばかりでなく、自然物も環境構成に積極的に入れるように述べている。

これらのことから、領域「環境」で育む資質・

能力の「好奇心」「思考力」「表現力」を、幼児教育の視点から考えると「感動」や「驚き」等の感性の獲得であるといえ、その為には、それらの場面と出合わせるための環境の構成が不可欠といえよう。更に、その環境の構成には幅広い環境、つまり、人工物だけでなく自然物も多く取り入れたり、多くの人とかかわらせたりということが大切であるといえる。

Ⅲ 領域「環境」の実状のインタビュー調査*1

1 調査目的

Ⅱによって、幼児教育においては資質・能力を育むこととして環境の構成が重要であることが考えられた。そこで、実際の幼稚園や保育園の現場では、どのような環境が構成され、どのような遊びが展開されているかを明らかにすることを目的とする。

2 調査対象

福岡県 A 町 A 幼稚園 A 先生
 福岡県 A 町 B 保育園 B 先生（保育士）
 福岡県 A 町 C 保育園 C 先生（保育士）

*福岡県 A 町立 D 小学校の1年生のほとんどが、この3園から入学してくる。

3 調査時期

令和元年8月中旬

4 調査方法

一対一の対面式のインタビュー調査。

5 調査内容

公平で正確な資料採取の為に、事前に調査目的や調査内容は明確にせず、先生（保育士含）達が印象に残っている、活動や場面を語れるように行った。質問項目は、以下の①～④の通りである。

- ① 幼稚園・保育園内における年長児の自然遊び
- ② 幼稚園・保育園外における年長児の自然遊び
- ③ 幼児が何度も遊んでいた遊び
- ④ 特に印象に残っている遊び

6 結果及び考察

【質問①②についての結果及び考察】

年長児が幼稚園・保育園内でどんな自然遊びをしているかを尋ねた。また、園外での遊びについても追質問している。

○ A 先生

Q	年長児さんは幼稚園内でどんな自然遊びをしていますか。
A	虫、今年は虫かな。春は花や虫、夏は砂、泥んこ遊び、水遊び。だいたい春は、ようこそ春じゃないですけど、テーマ的に新しいクラスになりました、ようこそ〇〇で。3歳児さんは無理だけど、4、5歳児さんは外に出かけて春見つけ。春のお花ってどんな花。菜の花、桜とかある場所へ。今年は桜探しに行ったね。桜探して言ってつつじを見つけ、まだつぼみやねって。全部含めての春さがし。
Q	春探しは園外ですか。
A	園外でもするし、園内でもするね。タンポポみつけたり、綿毛飛ばして遊んだり。（中略）結構出るね。バスがあるから。園外に行ったときに松ぼっくりやどんぐり見つけて持ち帰って作品を作ったり。その年の活動とか。例えば、去年の年長さんは水をテーマにして、川にいったり、泳いで、この川の水はどこから流れてくるのって。水源まで行こうとしたね。途中までは行きました。（中略）水だからね、それこそ色水で何色と何色で色水作りをして遊ぶし、砂場でも水の流れ方を見るし。お山つくってトンネル作って、水を流して。子どもたちが掘ったところは水が流れて行って、これが川の原理。ここまでは、子どもにとっては難しいから分からないけど、水の流れは流れで。

A 幼稚園では、充実した自然遊びが展開されていることがうかがえる。先生が意図的に色々な仕掛けをしていて、子供たちが気付けるように援助や促しを行っていることが分かる。そして、下線部分の様に、全ての仕掛けに気付かせてはいることがうかがえる。活動の後ろには、きちんとした意味が必ず存在しているが、難しいことは、無理に気付かせるのではなく、原体験として心に残るように充実した活動をしている。

○ B 先生

Q	B 保育園では、年長児さんは保育園内でどんな自然遊びをしていますか。
A	年間通して、外には常に出ています。グラウンドは広いので。グラウンドの奥の方のずっと

傾斜があって、そこにいろんな花とか草とかいろんな種類のものがあって。特に春は、ふきが採れたりとかするので、そういうのを採って食事につなげていく。じぶんたちですじを取ったりして。園の中で取れるもので何か食べる活動につながるの、ふきとかよもぎ。よもぎも採って。食べたりもする。

Q おもちとかですか。

A あっそう。この間はホットケーキにしました。よもぎをホットケーキに混ぜて。やっぱり色を見たいって言うのがあって。子どもたちに提案というか一緒にしていくんですけど。後は、自然にそのグラウンドだと、木とか集めて遊んでいたりと、夏は虫がすごいです。

Q 捕まえますか。

A 捕まえますね。バッタとか、ダンゴムシとか。で、面白いなって思ったのが、桜の木を伐採したときに、そこにダンゴムシの卵とかを見つけて。こんなとこに産むんだねって。見つけるのも好きだし。後は、環境的なことと言ったら、砂場が下にあるので、自然の感覚、砂の感覚、水と混ざった時の感覚、手で触れてとか。そういうのは意識的に遊んでいます。

B保育園でも、充実した自然遊びが展開されていることがうかがえる。B保育園の場合は、それほどアカデミックな内容の意図をもっているわけではないが、下線部の様に幼児期にふさわし、感性を促すような、意図をもっている。A幼稚園と同じ水を扱うにしても、感覚を大切にしている、砂の感覚、水と混ざった時の感覚の対比を必然性の中で経験させているのは感性の育成に繋がる。環境の構成についても、色々な環境を意図をもって提示していることがうかがえる。

○ C先生

Q C保育園の年長児さんは保育園内でどんな自然遊びをしていますか。

A 普通に毎日園庭に出て遊んでいますね。園長先生が草をむしったりしていると、子どもたちもマネなのか、お手伝いなのか、遊んでいるつもりなのか、結構草を抜いていますね。あ、それと、その草で、とった草で草相撲している子どももいましたね。草

相撲は始めると蔓延しちゃって。みんなで大会が始まっちゃうんです。でも、咲いている花や花壇の物には、一切手をださないのですね。それは、ねらっているんですが、皆探しています。あ、それと、毎日決まった時間に外にお散歩に出るんですけど、最近猫じゃらしをみんな抜いています。あの、ずぼすぼって感じが楽しいみたいです。

Q 園外には結構出るのでですか。

A そうですね。暑いときは、水遊びなんですけど、6月頃までは、近くの遊歩道や公園にお散歩で出かけます。遊歩道には、秋になるとドングリがたくさん落ちるんですよ。みんな一生懸命ひろいます。ドングリを使ってみんな考えて、作品を作ったりもします。あとは、そうですね。野菜は育てています。近くに畑を借りていて、そこで収穫したもの、皆で収穫するんですけど、調理師さんのところに持って行って、給食に入れてもらうんです。

A幼稚園やB保育園に比べると、ダイナミックな活動はそれほど多くないが、毎日の日課の中で、子供たちには様々な経験をさせていることがうかがえる。下線部の様に、花壇の花をむしって遊びに使わない子どもの姿からは、遊びの中で自然と取捨選択や、自然遊びを通じて人間性が育まれているといえる。また、日常の中で、先生達が子どものよさを見出し認めてあげている様子もうかがえる。一人一人に寄り添った指導ができているからこそ、子どものよさや成長を見逃すことなく捉えることができるであろう。

【質問③④についての結果及び考察】

年長児がよくやっている自然遊びを尋ねた。更に話の展開の中で、印象に残っている自然遊びを追質問している。

○ A先生

Q 年長児さんで特に力を入れている、よく遊んでいる自然遊びはありますか。

A 山登りや虫かな。特にダンゴムシかな、あとバッタ。鞆に入れたり。それは捕まえられるんだけどね、川に行くと、かにを捕まえてごらんっていても、むりって。経験がないからなんだろうね。外との活動は単発になっちゃうけど、園内では繰り返し

関わって。極力園外に出て、自然に触れさせたいし、歩くこと、友達と一緒に、小さいこと大きい子とが手を繋いで歩く経験。歩きながらも6月は水なかったけど、今どう。お米できてるねとか。自然にも触れながら。

Q 先生が、印象に残っている自然遊びはありますか。

A 虫集めたりね。飼育はどっかで必ずするよ。野菜育てたりとかね。虫育てたりとか。野菜は、始めのうちは、当番さん水やったのとあって言ったら、あって言ってやりに行くけど、だんだん、水やったんかね、って言ったら、もうやったあって、もう自分たちで水やって育てて。始めはだめだけど、だんだん自分達でかかわるようにね。

A先生は、子どもたちに多くの経験をさせたいことがうかがえる。その為には、何よりも環境の構成が不可欠であることが予想できる。例えば、下線部の様に、「かにを捕まえてごらん」は、事前に安全管理をしていなければ展開し得ないことである。また、波線部のように、先生自身が印象に残っている自然遊びは、子どもの成長した姿とリンクしていることがうかがえる。笑顔で回答しているA先生の姿から、子どもの成長に喜びを感じていることがうかがえる。

○ B先生

Q 幼児が特にこの遊び気に入ってたよとか、何度もしていた自然遊びはありますか。

A 基本鬼ごっこ。走りたいが一番だから。後は、自然で言うと、収穫、集めるのは好きだから。秋はドングリを集めたりとか。収穫が好きです。木、木の葉とか。石もこだわってた。色々な石を見つけて大事な石とかも取ってた。持って帰ろうとして、お母さんから持って帰らんとかって言われているけど。大事な物とか結構、写真立とかにしたりもしたし、葉っぱは…。外でも継続でも遊ぶってなったら、課題があったらずっと続くんですよ。縄跳びとか。そういうのは継続して遊びますね。鬼ごっこでも、地面に家を描くとか、で、ルールとかも増えていって。部屋では、絵が中々描けない子とかも外なら書けるんだって。

Q 印象に残っている自然遊びはありますか。

A これだけ自然に囲まれているので、すごくあります。都会の保育園の先生に話とか聞くけど、やっぱり恵まれているなって思いますね。やっぱりいろいろな虫とかいるのが。他のところは公園行かないとってというのが結構あるけど、だからここはすごい恵まれてるなって思います。

Q 私もこんなに経験ないですもん。

A 私もないです。やっぱり、その中でしか学べないこともあるから、今の時期しかないからですね。学校に行くと限られてくるじゃないですか。だから、今のうちにいっぱい。後、自然遊び、身近なところで言ったら、笹船、今日水たまりがあるので、あっこで子供が遊んだりとか。

下線部に示したように、子どもが自分達の好きなことをのびのびと好きなだけしている印象を受ける。また、繰り返し遊ぶ中で、遊びも進化しているようである。これこそまさに、子ども自身が遊びの中で発見したことを工夫し、自分なりに遊びを楽しくつくり上げていおり、「生活に取り入れていこうとする力」の表われであると考えられる。更に、波線部で示したように、必ずしも先生自身が経験したり、得意だったりするものではない。しかし、子どもを見た中で、誰が興味をもち、誰が探究心をもって関わるか分からない。先生として、自分ができないから、構成しないのではなく、B先生のように、「その中でしか学べないこともあるから、今の時期しかない」との子どもを成長を一番に望む気持ちで、環境の構成をするべきであると考えられる。

○ C先生

Q 児が気に入っていた遊びや何度もおこなっていた遊びはありますか。

A さっきもいった、草相撲かな。始めは園長先生と数人でやっていたのだけど、気付いたらとても多くの子供が参加していて、大会の様になっていた。あと、ドングリも良く拾いますね。いつもより遠くにお散歩に行くときは、途中の遊歩道に落ちているドングリは無視して進んで欲しいですが、無理ですね。子供は、ドングリ拾いを始めてしまいます。どんな遊びをやっても、ブームはきますよ。

Q	先生が印象に残っている自然遊びはありますか。
A	草相撲でも猫じゃらしでもそうですけど、 <u>子供たちって遊びを見つける天才だなおもいますね。猫じゃらしなんて、どこにでもあるし、その分私たちって気にもとめないじゃないですか。でも、子供たちはそれを見つけて楽しんじゃうんですね。</u> C保育園では、そんなにこれっていう活動はしないのですが、一つ一つの活動に必ず印象的な一幕があります。

下線部の姿は、まさに遊びを通した人間関係の構築であると考えられる。更に、C保育園はイベント的な大きな活動をさほど行ってはいない。しかし、だからこそ日常の中の何気ないことに気付ける子どもが出てくるし、工夫して楽しく過ごそうとする子どもが出てくると考える。波線部のC先生のコメントは、子どもにこのような好奇心をいつまでも持ち続けて欲しいとの願いが込められているように見受けられる。子どもの成長を願い、子どもの為に環境を設定し、学びの為の援助を惜しみなく行うところは、A先生にもB先生にも言えるところである。

7 インタビュー調査のまとめ

研究対象の園では、意図をもった活動がふんだんに用意されていることがわかった。A幼稚園の様に、「川の流れ」や「水田の様子」等、小学生でも気付くのが難しそうな高度な意図もあるが、A先生は何もそのことに、無理して気付かせようとは考えていない。好奇心や探究心をもった活動の中で、原体験として蓄積させ、更にはそんな好奇心や探究心をもち続けることをねがっている。また、どの幼稚園、保育園の先生も、とても楽しそうにエピソードを語っていた。子供のことを思い出して語るときに、楽しそうな先生を通して、その背景には、楽しく活動している子供の姿が垣間見える。

以上のことから、幼稚園、保育園の先生達は、決められたことをしなければならないという、教科書がないこともあり、色々なことを考え、多くの気付きのポイントを用意していることが分かる。更に、それらに無理矢理気付かせるようなことはせず、子供たちの学びのペースで指導していることがわかった。少なくとも、今回インタビューした3園については、どこも充実した活動をしているし、活動の中で多くの学びを蓄積して

いることが言える。その上で小学校での生活科の役割を考えると、気付きを自覚化させたり、考えさせたり、関連付けさせたりすることであろう。筆者自身このインタビュー調査の結果を見たとき、幼稚園、保育園の懐の深さや環境の構成の多様性に驚いた。小学校の先生は、幼稚園、保育園の先生達のこのような実状を、まずは知ることが、幼児教育と小学校教育の円滑な接続の第一歩であると考えられる。

IV おわりに

本研究では、領域「環境」において育む資質・能力として、「好奇心」「探究心」「思考力」等は、「感動」や「驚き」といった感性と繋がっていることを見出すことができた。さらにその為には、環境の構成が不可欠であり、その環境に子どもたちが浸り込んで活動することが感性の育成に繋がる。このことは、インタビュー調査によって垣間見られた子どもの姿からもいうことができ、本研究の後押しとなっている。

今後この研究を充実させるためには、幼児教育と小学校教育の円滑な接続、つまりは、保幼小接続の視点を入れて考えて行きたい。B先生がインタビューにおいて述べていたように「学校に行く（豊かな活動や経験）が限られてくる」のではなく、子供の感性を育てるために小学校においてもどんな活動ができるのかを考え提示していきたい。小学校が、幼児教育での学びを理解し、生かすことができたときに、本当の意味で保幼小の接続がなされるものであると考えられる。

全国的に保幼小の接続はスタートしたばかりである。但し、全く何もないところから保幼小の接続の形をつくり上げるのではなく、これまで進校や先進地域が蓄積してきたものは確実にある。それらの経験を生かし、更に充実させていくことが今後の使命であると考えられる。今後、更に充実し、実施されていくことが予想される保幼小の接続に寄与する為に、引き続き研鑽を深めて行きたいと考える。

【引用文献】

- 1) 中野重人・高岡浩二『改訂 小学校学習指導要領の展開』明治図書出版 1989年 p.15
- 2) 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策について（答申）」平成28年12月21日
- 3) 菅沼敬介・野田敦敬「生活科における自然体

- 験活動を基盤とした『人とかかわる力』の育成に関する研究」愛知教育大学研究報告 第57輯 2008年 pp.1-8
- 4) 菅沼敬介・野田敦敬「主体的に学びに向かうことで『自己肯定感を高める生活科学習』に関する研究」愛知教育大学教職キャリアセンター紀要 第3号 pp.115-122
- 5) 文部科学省「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説生活編」東洋館出版社 平成30年 p.8等
- 6) 嶋野道弘・寺尾慎一『生活科の授業方法』ぎょうせい 2003年 p.36等
- 7) 文部科学省「幼稚園教育要領解説」フレール館 平成30年 p.34等
- 8) 中野真志 加藤智『探究的・協同的な学びをつくる』三恵社 2015 p.53
- 9) 前掲書8) p.53
- 10) 上掲書8) p.53
- 11) 新保真紀子『「小1プロブレム」に挑戦する』明治図書 2001年 pp.11～20
- 12) 上掲書7) p.50
- 13) 上掲書7) p.50
- 14) 上掲書7) p.50
- 15) 上掲書5) p.12
- 16) 上掲書5) p.13
- 17) 上掲書7) pp.54-73
- 18) 上掲書7) p.52
- 19) 上掲書7) p.193
- 20) 上掲書7) pp.64-69
- 21) 中央教育審議会教育課程部会幼児教育部会資料7 平成28年3月30日 p.2
- 22) 厚生労働省編「保育所保育指針解説」フレール館 2018年 pp.228-247
- 23) 神長美津子『保育の基本と環境の構成』ひかりのくに 1998年 p.44
- 24) 前掲書23) p.32
- 25) 上掲書23) p.33
- 26) 石垣恵美子・玉置哲淳・島田ミチコ・植田明『新版幼児教育課程論入門』建帛社 平成14年 p.146
- 27) 山田敏『遊びを基盤にした保育』明治図書 1999年 p.114
- 28) 前掲書27) p.115

注*1 本調査資料は、2019年度福岡教育大学4年生、廣谷香奈枝が「五感を使った自然体験活動の充実を促す生活科授業の研究～幼保における経験の差に左右されない教材開発を中心として～」の研究資料として調査したものの内、幼児教育に関する音声データに限り、本研究の視点に基づいて分析をおこなったものである。調査実施者及び調査対象者、研究対象園からの承諾と同意は得ていることを申し添える。